

大震災鳥眞画報



攝政宮殿下の御巡視
—一を其の土間にさしで風災物—

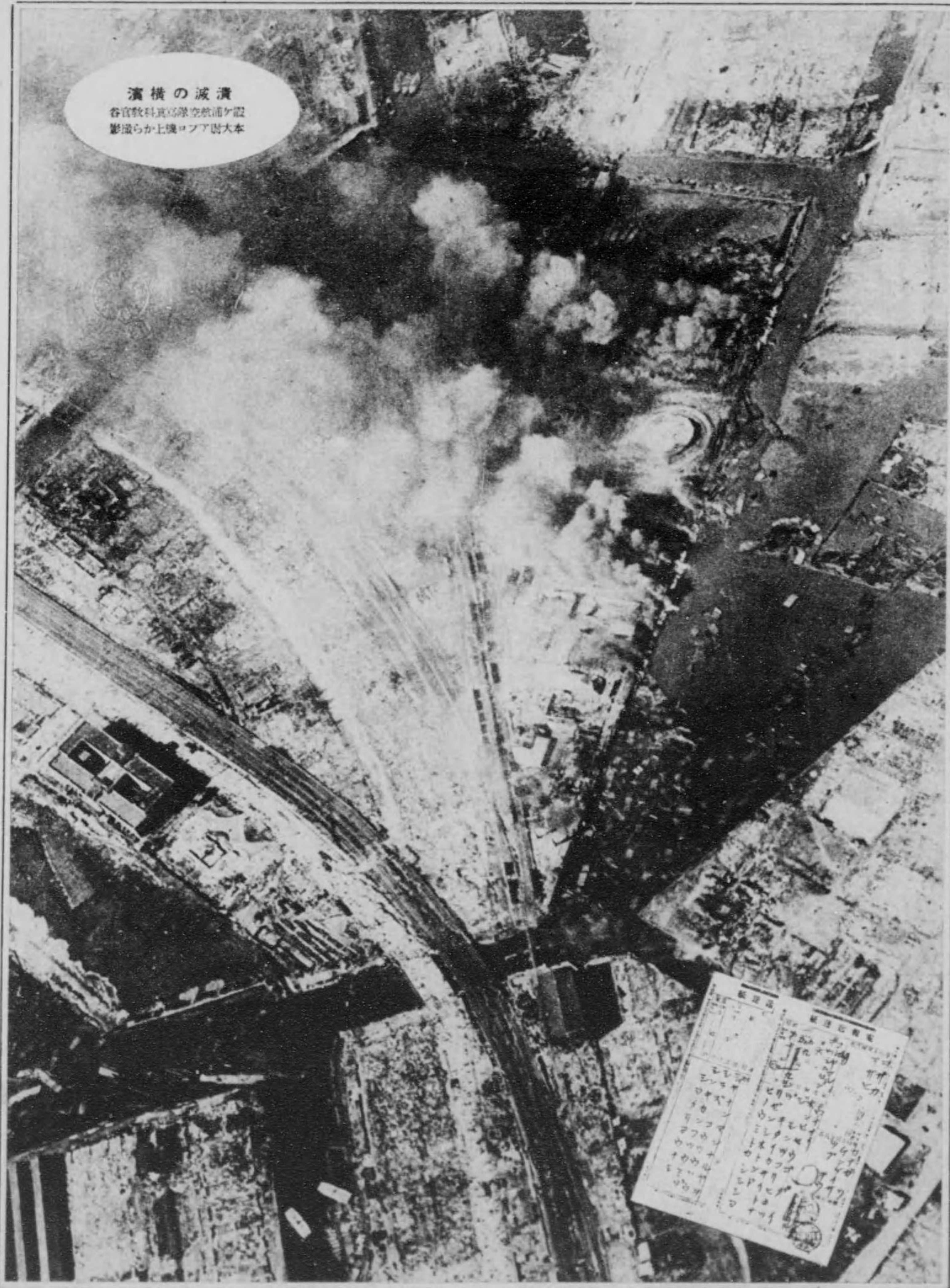
第二輯

大阪朝日新聞社

始



6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100



濱横の滅潰
谷官教料真島學空航浦ヶ設
影撮らか上機ロアア器大本

報定報新至聖中央アレコたせ寄に器備新日朝版大り上長部業警警川赤録

勅語

朕神聖ナル宗祖ノ洪範ヲ紹キ光輝アル國史ノ成績ニ鑒ミ皇考中興ノ皇業ヲ繼承シテ背テ意ラサランコトヲ庶幾シ夙夜兢兢トシテ治ヲ圖リ幸ヒニ宗祖ノ神佑ト國民ノ協力トニ賴リ世界空前ノ大戦ニ處シ尙克ク小康ヲ保ツテ得タリ曷ノ闕ラン九月一日ノ激震ハ事咄嗟ニ起リ其ノ震動極メテ峻烈ニシテ家屋ノ倒塌男女ノ慘死幾萬ナルヲ知ラス嗣ヘ火災四方ニ起リ炎滔天ニ沖リ京濱其他ノ市邑一夜ニレテ焦土ト化ス此間交通機關杜絶シ爲ニ流言蜚語盛ニ傳ハリ人心洶々トシテ倍々其慘害ヲ大ナラシム之ヲ安政當時ノ震災ニ較フレハ寧ロ凄愴ナルヲ想知セシム

朕深ク自ラ戒懼シテ已マサルモ惟フニ天災地變ハ人力ヲ以テ豫防シ難ク只速カニ人事ヲ盡シテ民心ヲ安定スルノ一途アルノミ凡ソ非常ノ秋ニ際シテハ非常ノ果斷ヲ用スルヘカラス若シ夫レ平時ノ條規ニ膠柱シテ活用スルコトヲ悟ラズ緩急其ノ宜シキヲ失レテ前後ヲ誤リ或ハ個人若クハ一會社ノ利益保障ノ爲メニ多衆災民ノ安固ヲ脅カスカ如キテハ人心動搖シテ停止スル所ヲ知ラス朕深ク之ヲ憂揚シ既ニ在朝有司ニ命シ臨機救済ノ途ヲ講ゼシメ且ツ魚屑ノ急ヲ拯ウテ以テ惠撫慈養ノ實ヲ擧ケンコトヲ欲ス

抑モ東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ瞻仰スルトコロナリ一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其ノ舊形ヲ留メスト雖モ依然トシテ我國都タルノ地位ヲ喪ハス之ヲ以テ其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ恢復スルニ止マラス進ンテ將來ノ發展ヲ圖リ以テ悲衝ノ面目ヲ新ニセザルヘカラス

惟フニ我カ忠良ナル國民ハ義勇奉公朕ト共ニ其憂ニ頼ランコトヲ切望スヘシ之ヲ慮リテ朕ハ宰臣ニ命シ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノコトヲ審議調査セシメ其ノ成案ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ善後經營萬遺慮ナキヲ期セントス在朝有司克ク朕カ心ヲ心トシ速ニ災民ノ救護ニ從事シ朕ニ流言ヲ鎮壓シ民心ヲ安定シ一般國民亦克ク政府ノ施設ヲ翼ケテ奉公ノ誠個ヲ致シ以テ興國ノ基ヲ固ムヘシ朕千古無比ノ天災ニ會シテ國民ノ心痛切ニ憂食爲メニ安カラス爾臣民夫レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

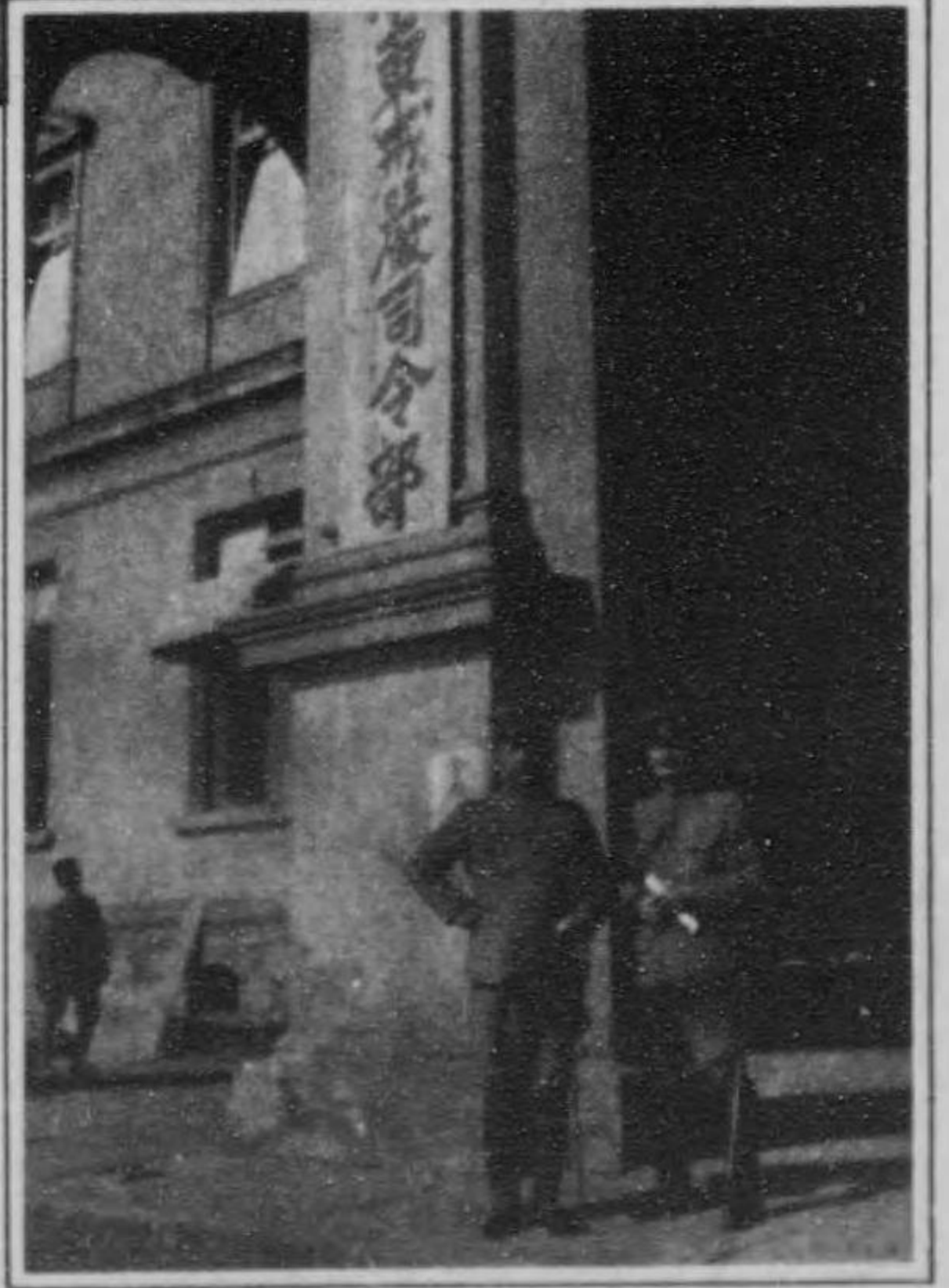
御名御璽
攝政名
本年十二月九日
内閣總理大臣副署

大詔發一帝都復興に關して

ふ賜を詔優に民國
らせらあ念給く太を災震の同今はに下第兩后皇皇天
殿宮政議りあし召御に官議政奉を相首本山日二十れ
たつは是を詔兼りよ下



小松宮殿下銅像に遊樂
者の群りれ上野公園



關東或蔵田各部と前田令官
關田大樹左河部參謀長

謄寫版の官報
印刷局の機減て印刷機備修のため

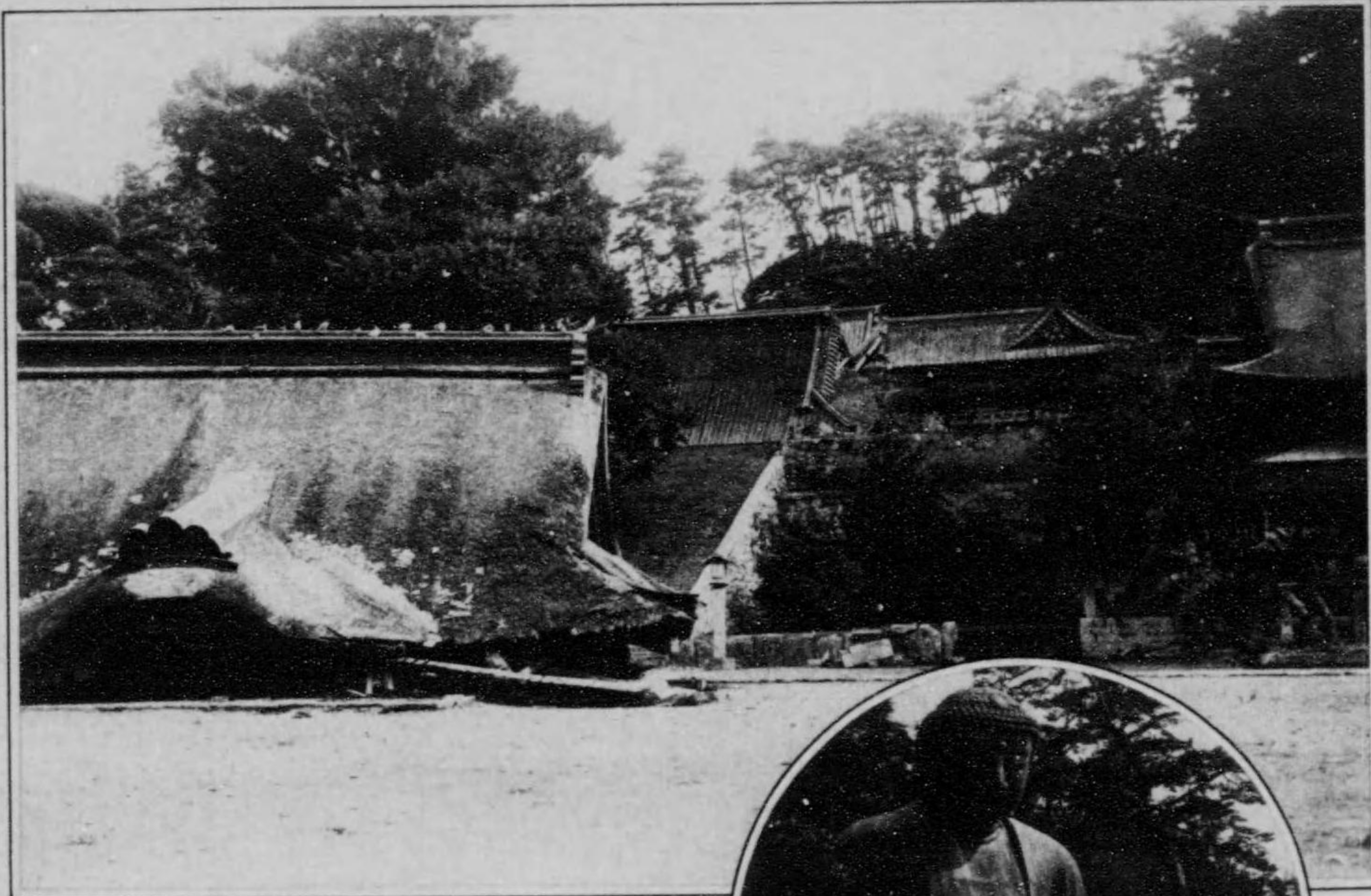


む込崩雪に流濁川舟蛇てし屋崩屋家 盒底根箱



(根箱本) ルテホ見士富たし入湖に湖の蘆

本社記者写真部の自転車旅行



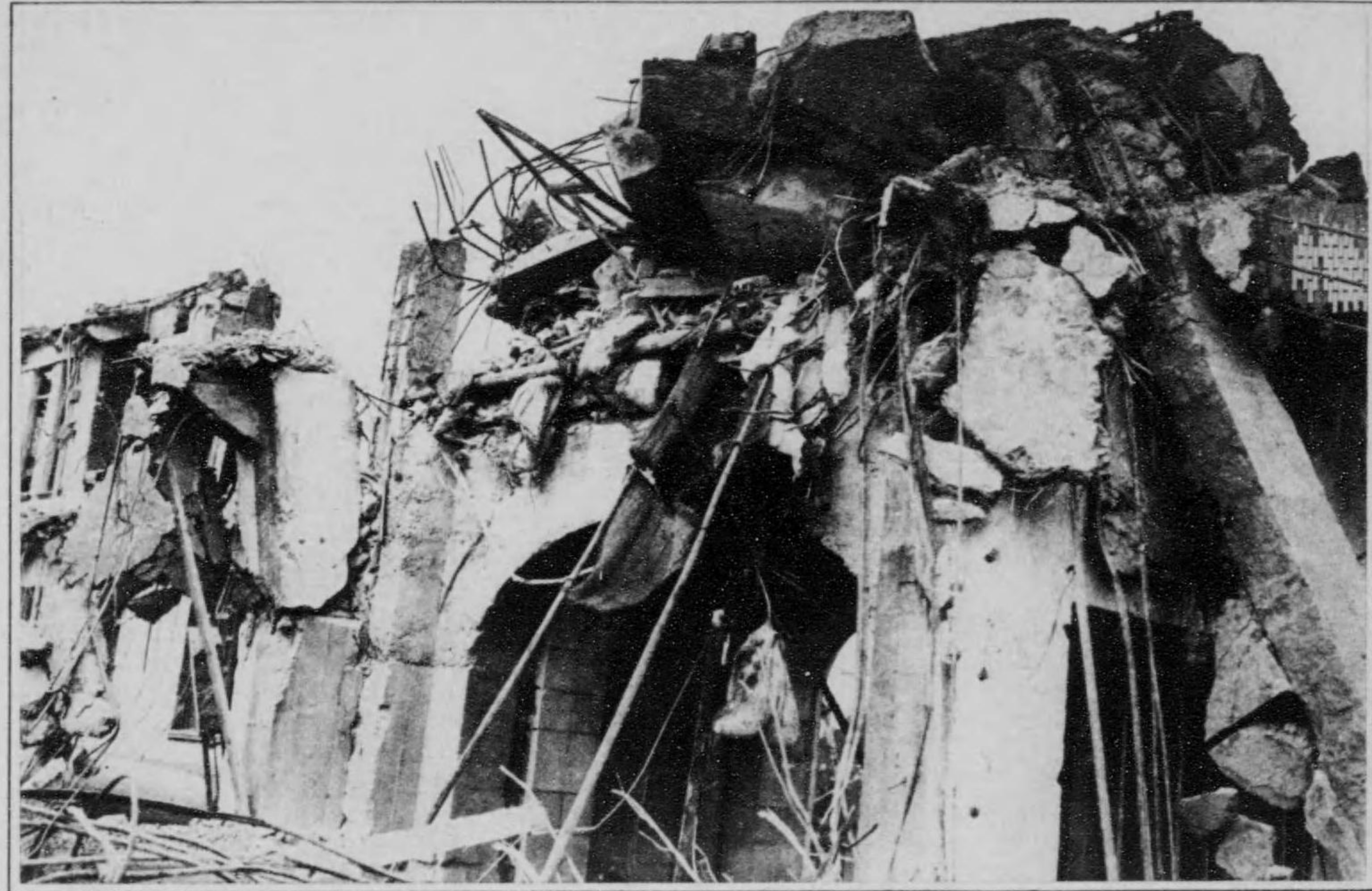
鎌倉鶴ヶ岡八幡



（寺経 佛大の谷長
に前寸五尺二で敷置いし敷
長、約三寸の向右メノ



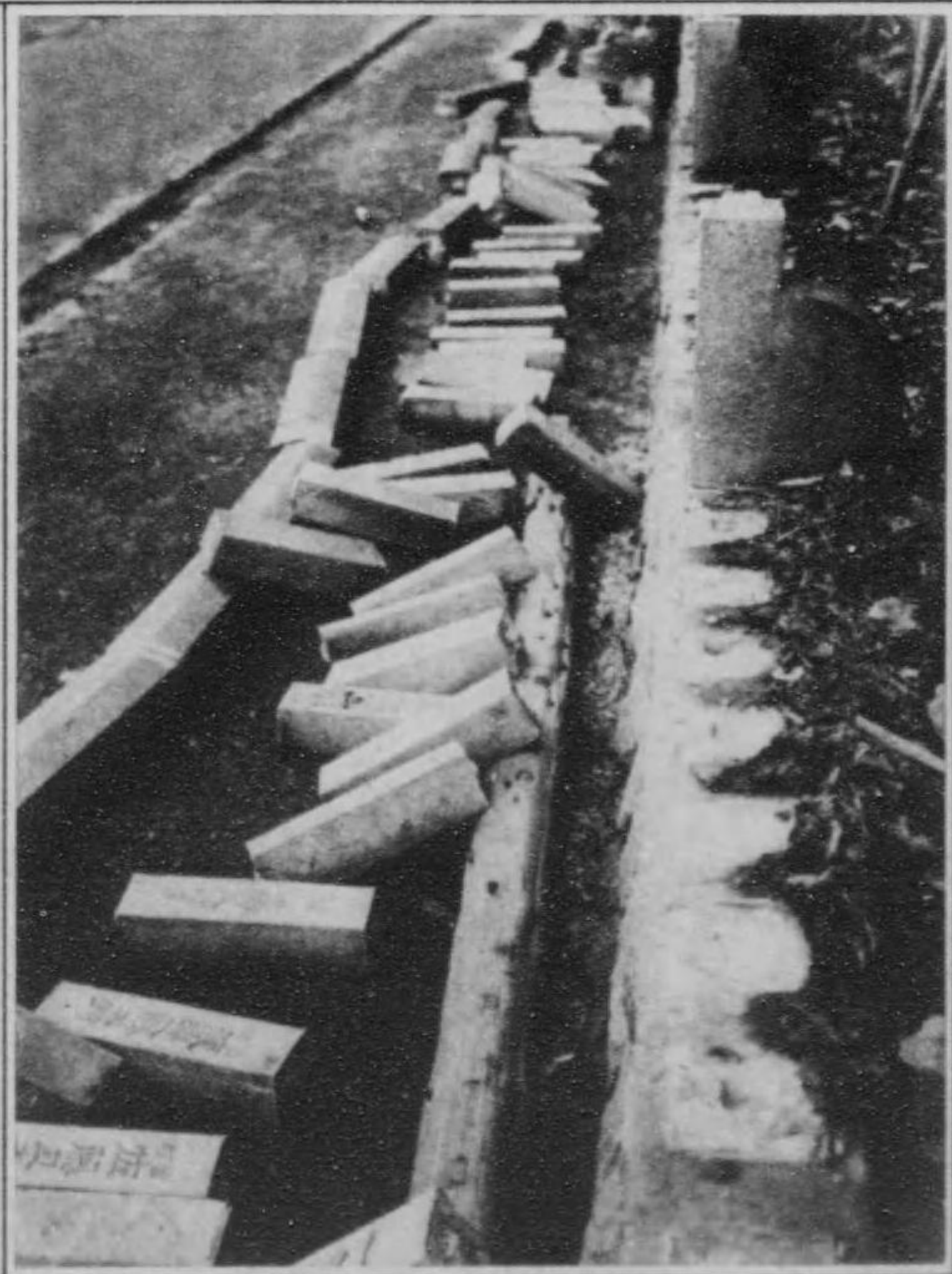
濱ヶ比由たれは襲に噴海と震地



(東京) 態状壊崩の屋家世入す標戦



(諏方豆伊) 街たけ碎に塵微



社神間渡場殿御



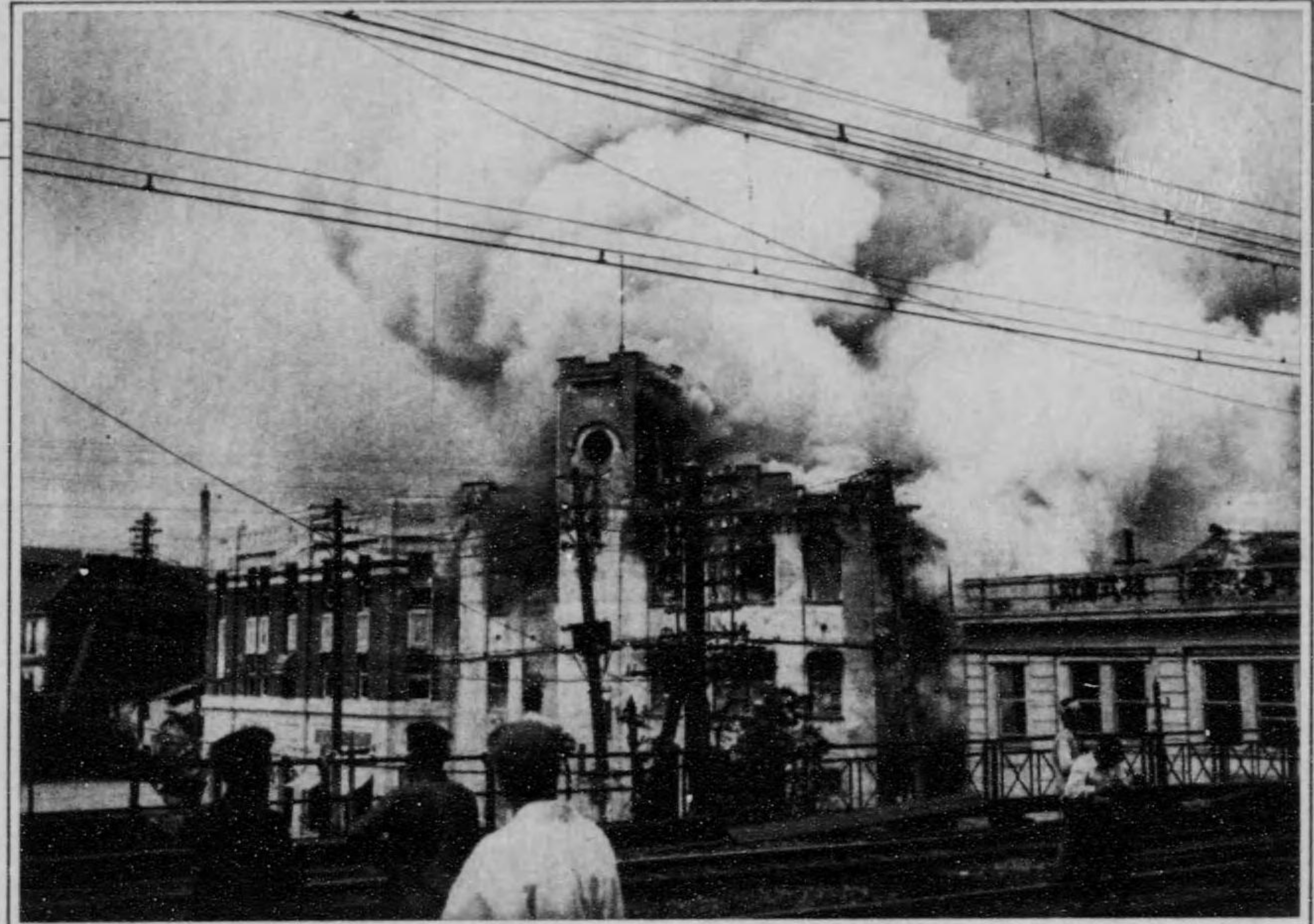
落惨の橋鐵川入馬

小田原電車を戻し
潰した大石(向本)



(根野) 石岩大たち落れ崩に道新澤の塔

跡焼の面方座銀なっやの墟廢 1
 —上見らか景高就開新日朝京東—
 車動自と車電たへた横に面路を骨殘 2
 —姿の後河町張尾地觀前の劇設遊樂—



消防司令部調査に據る東京の罹害戸
 數三十三萬四千六百十三此うち
 二十九萬八千四百八十五戸は火災に燒つて焼
 失してゐる餘部五萬七千二百二十八戸は
 火災の直には焼失を蒙らず（上は有樂町
 下日本橋區内）



店服與越三—たつ殘みの皮てし畫け燒





凄愴の氣迫る震火の跡
日本橋區内

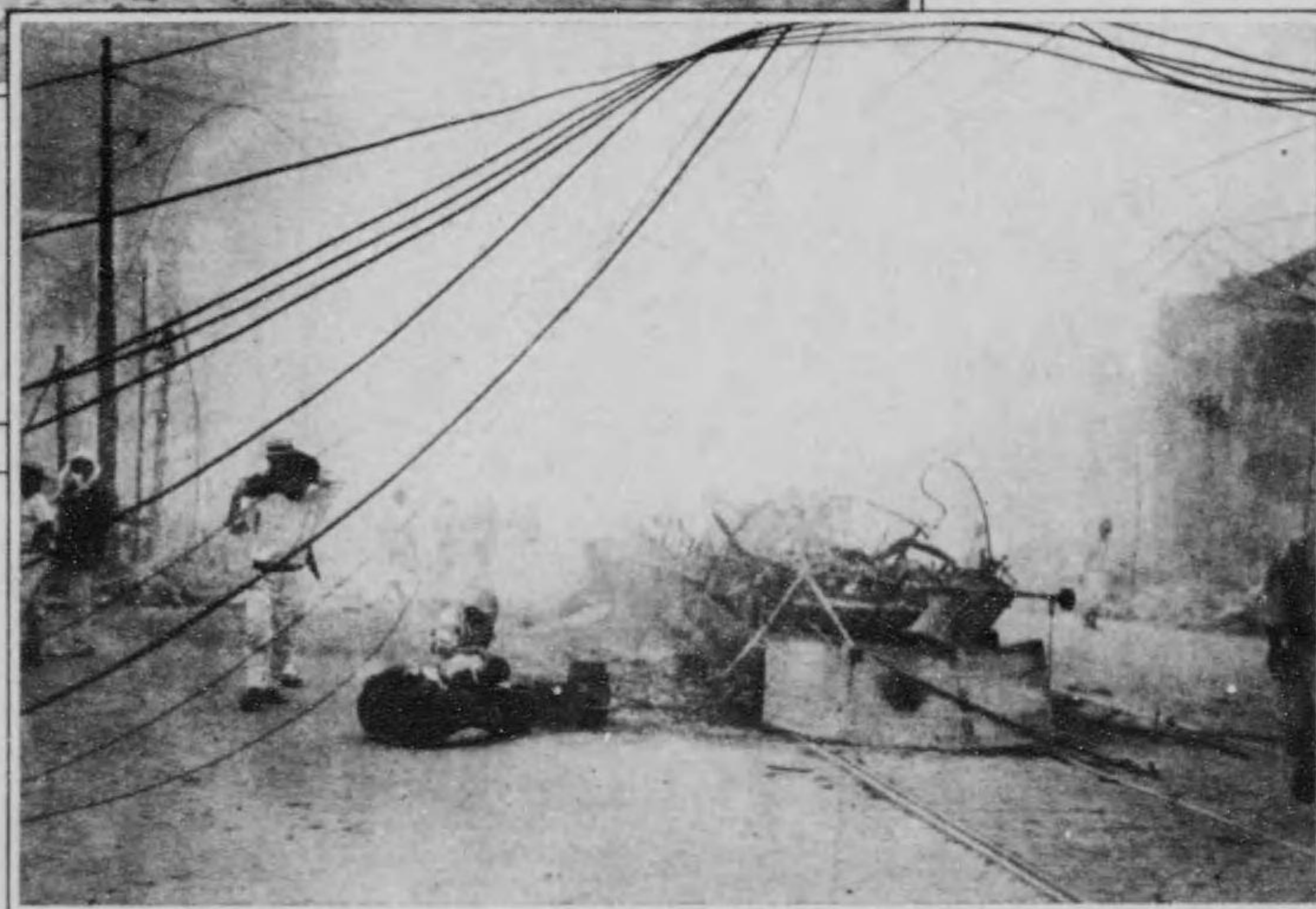


グンイデルビ動揺たけ崩さるビ丸な空突の形外

惨憺の家—日本橋區内



亂垂した架空電線
日本橋區内



銀座通り

路小廣野上





焼失前の賑ひ

跡の區六草淺し深感の轉瞬枯榮



せみ仲草淺たし亡焼



跡焼の面方町軒七草淺び及場車停野上
——た見らか園公野上——



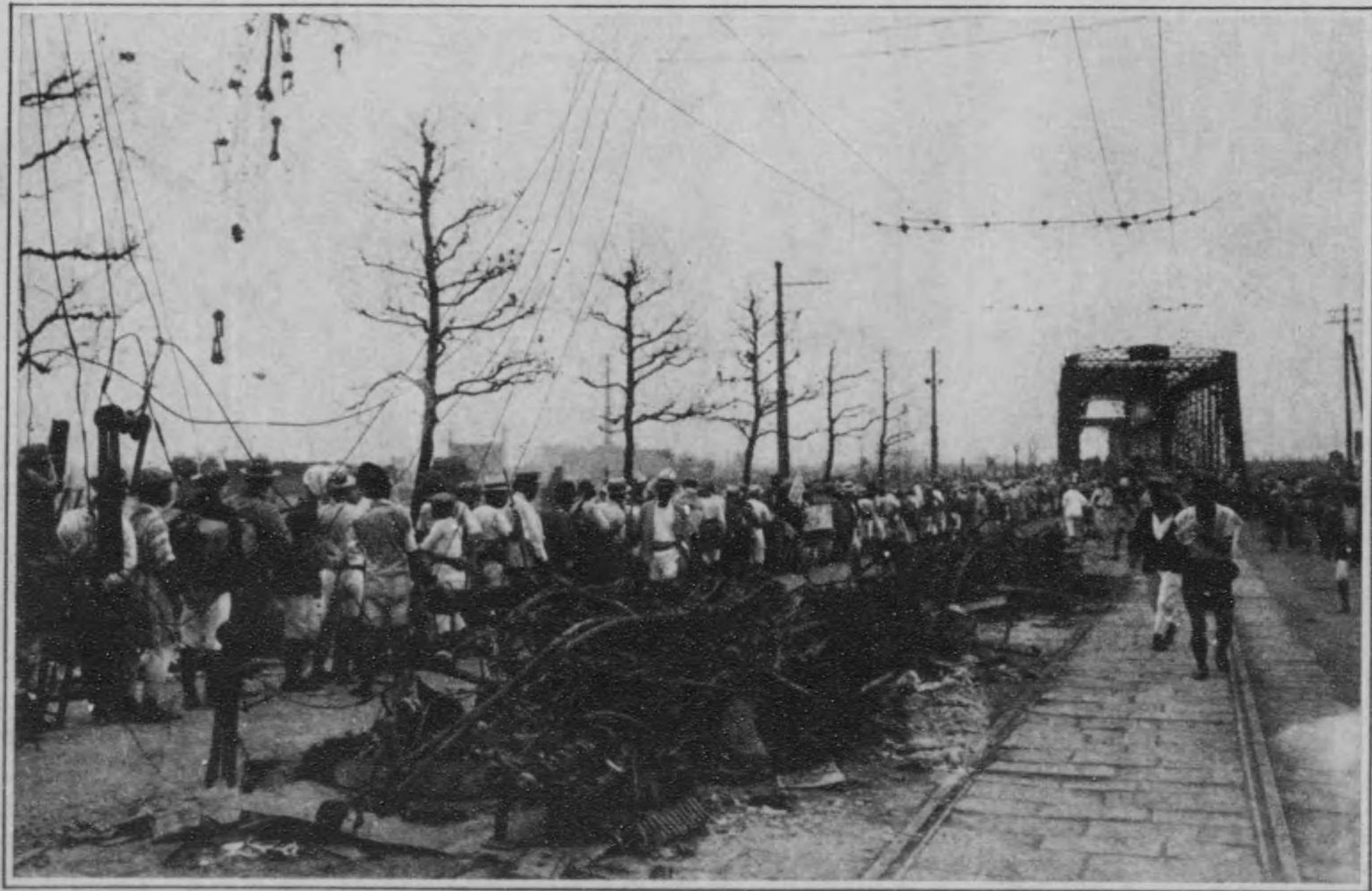
橋正輝延坂本日—落壁の道車と道人 てし殘を路車電



都宮川沿畔は部上央中— 近附橋英阪赤



跡模の所本一館 技國たつ 残みの組骨



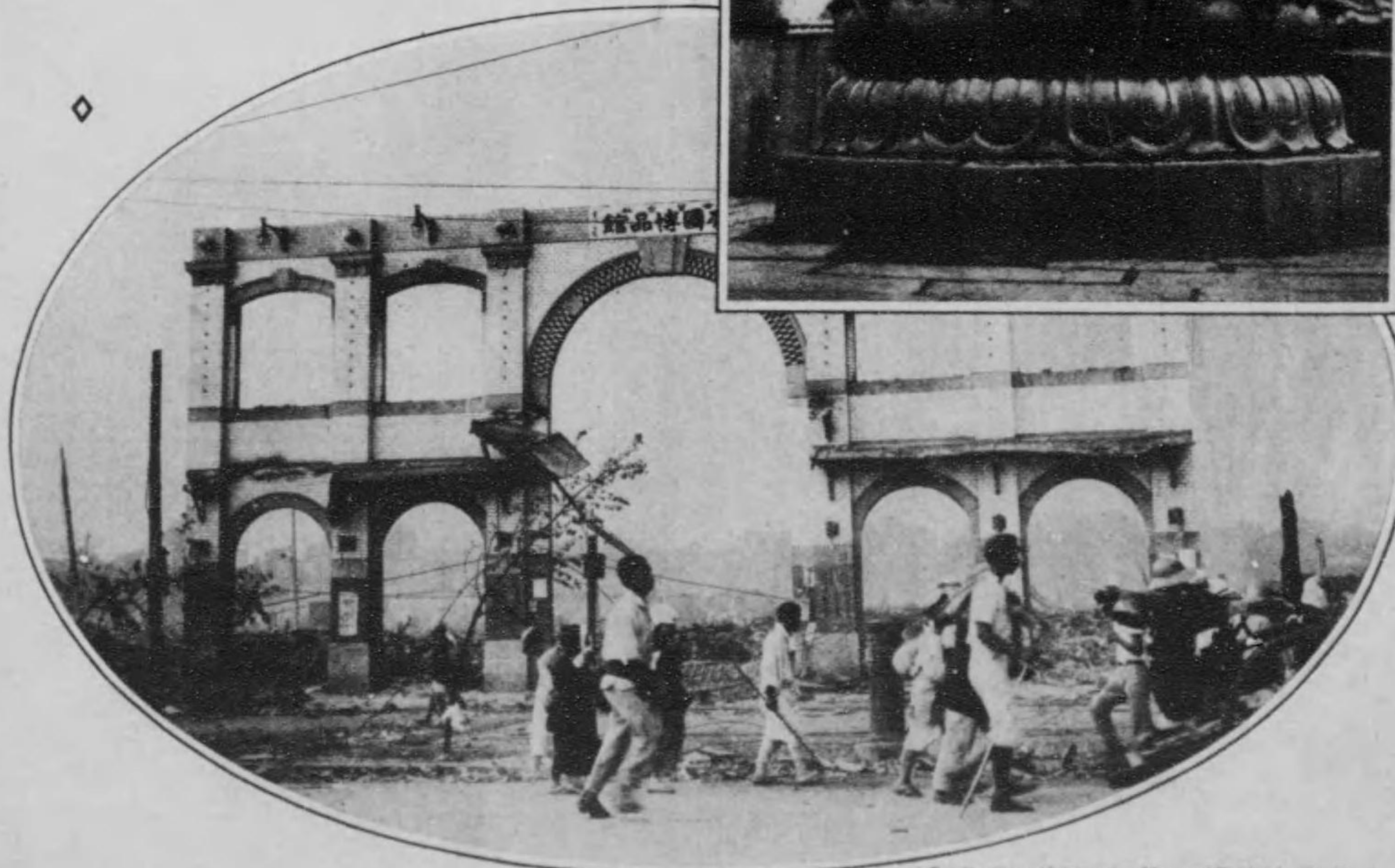
たし出を者死のく多一橋 庭



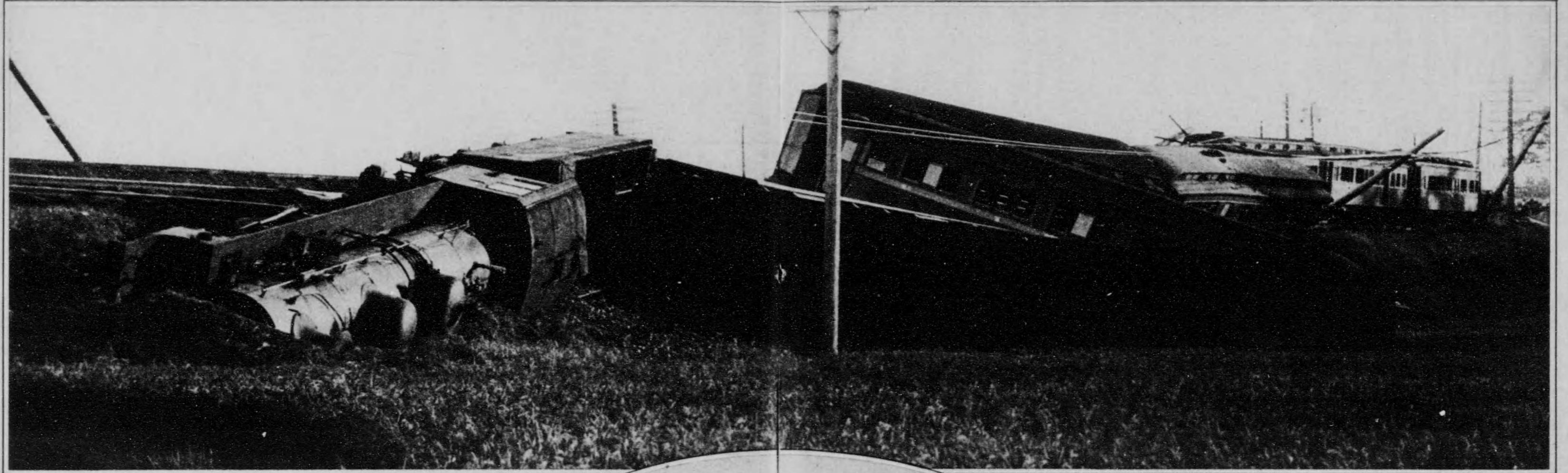
望原のか勢機寺願本地築一 原の疎瓦るた涼荒



揺り落ちんとして
危なく焼つた
大地蔵菩薩(東京)



うやのアーブはへ橋外たつ残一館 品博路小廣野上



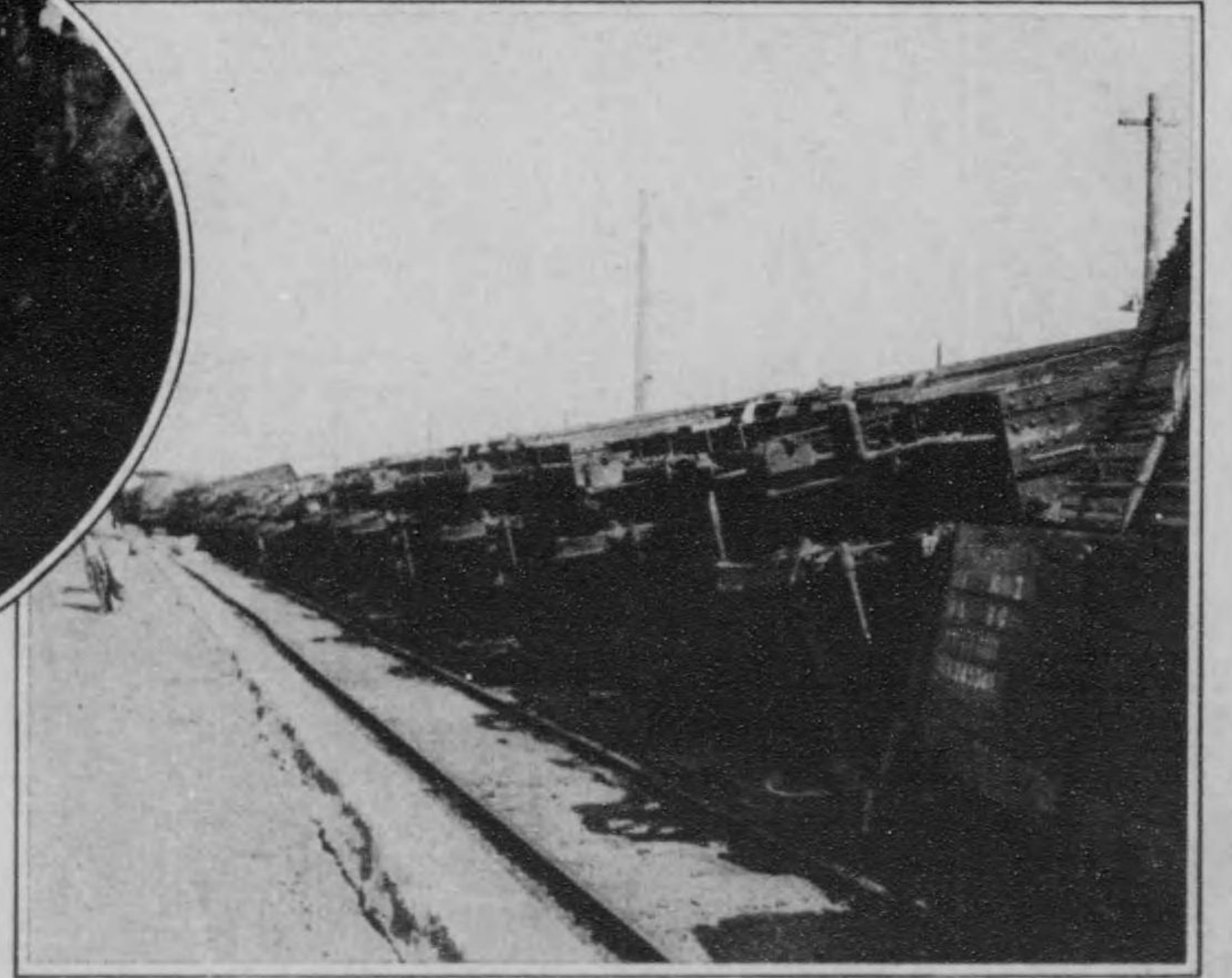
覆轉の車列號四十七たれらへ傳を明不方行時一
死者傷者二十名死一ろここの丁十東縣大



近附大一路線たつ曲にうやの鈴



(近附大) 製鐵大の道街



内線時ク字一車列たつなし倒横

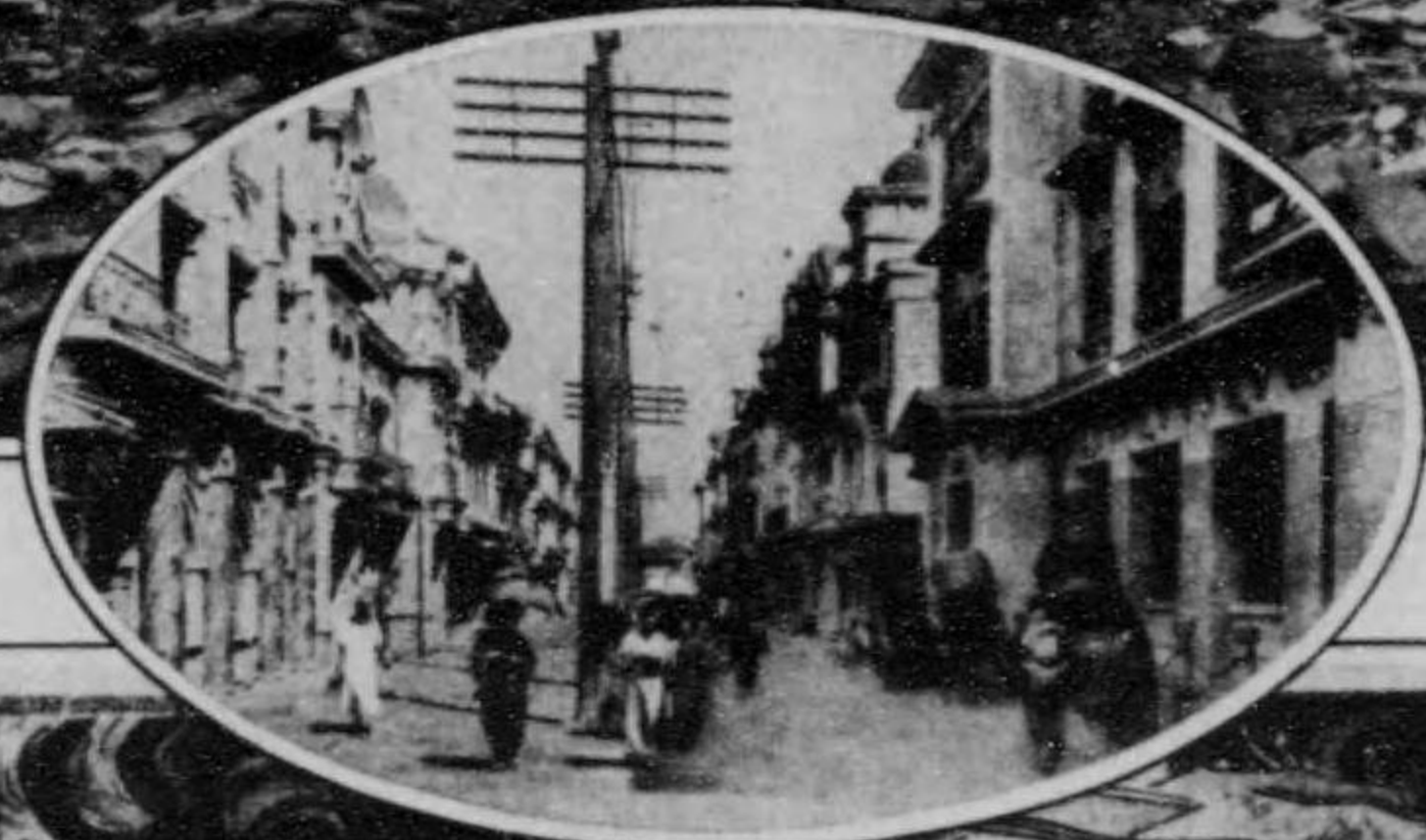


大島沿岸の民衆群 大島沿岸の民衆群 大島沿岸の民衆群



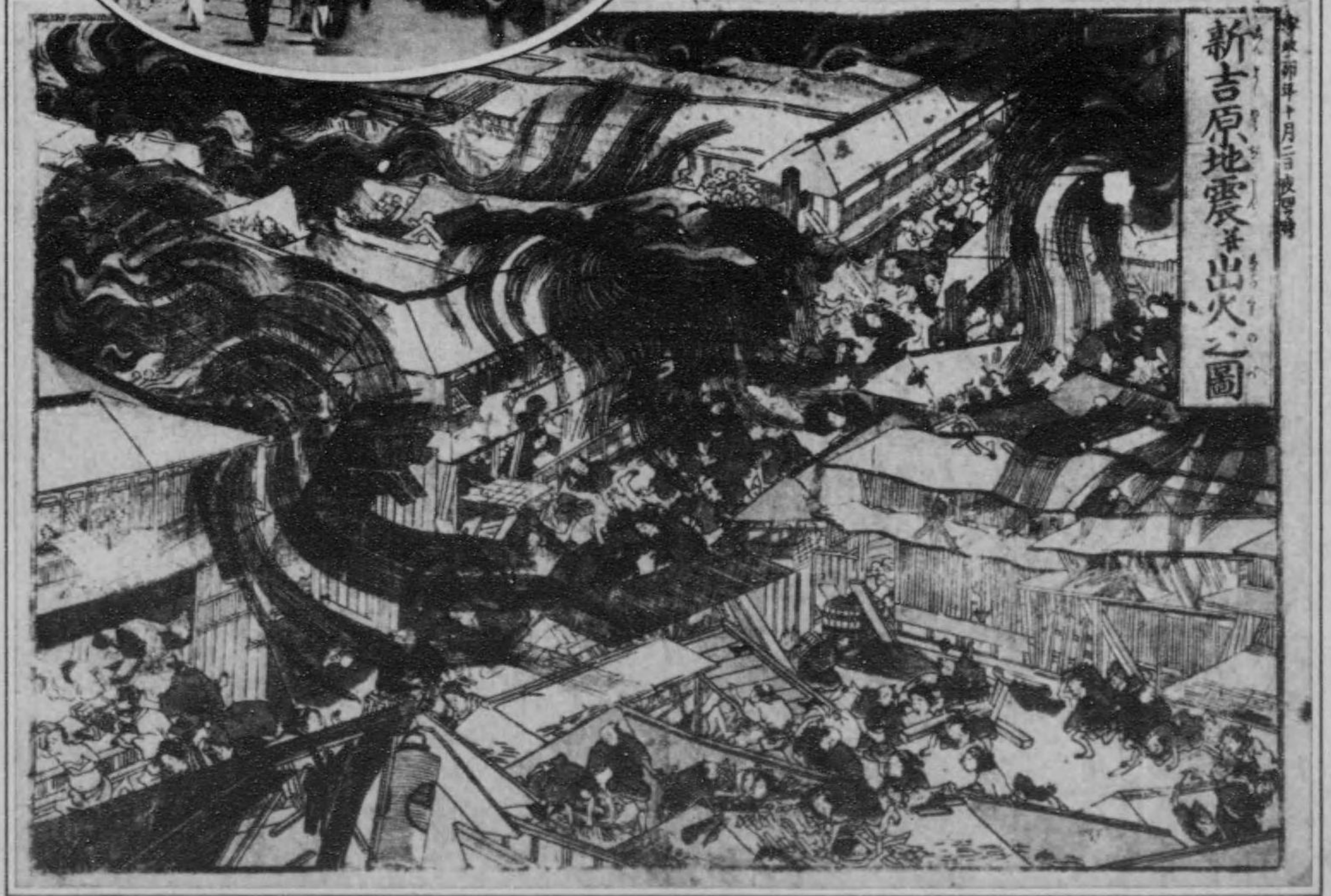
倒れ松

大島沿岸の民衆群



原吉の前災

安政大震の地新原吉 (津波) 千三娘美里の月巻の花



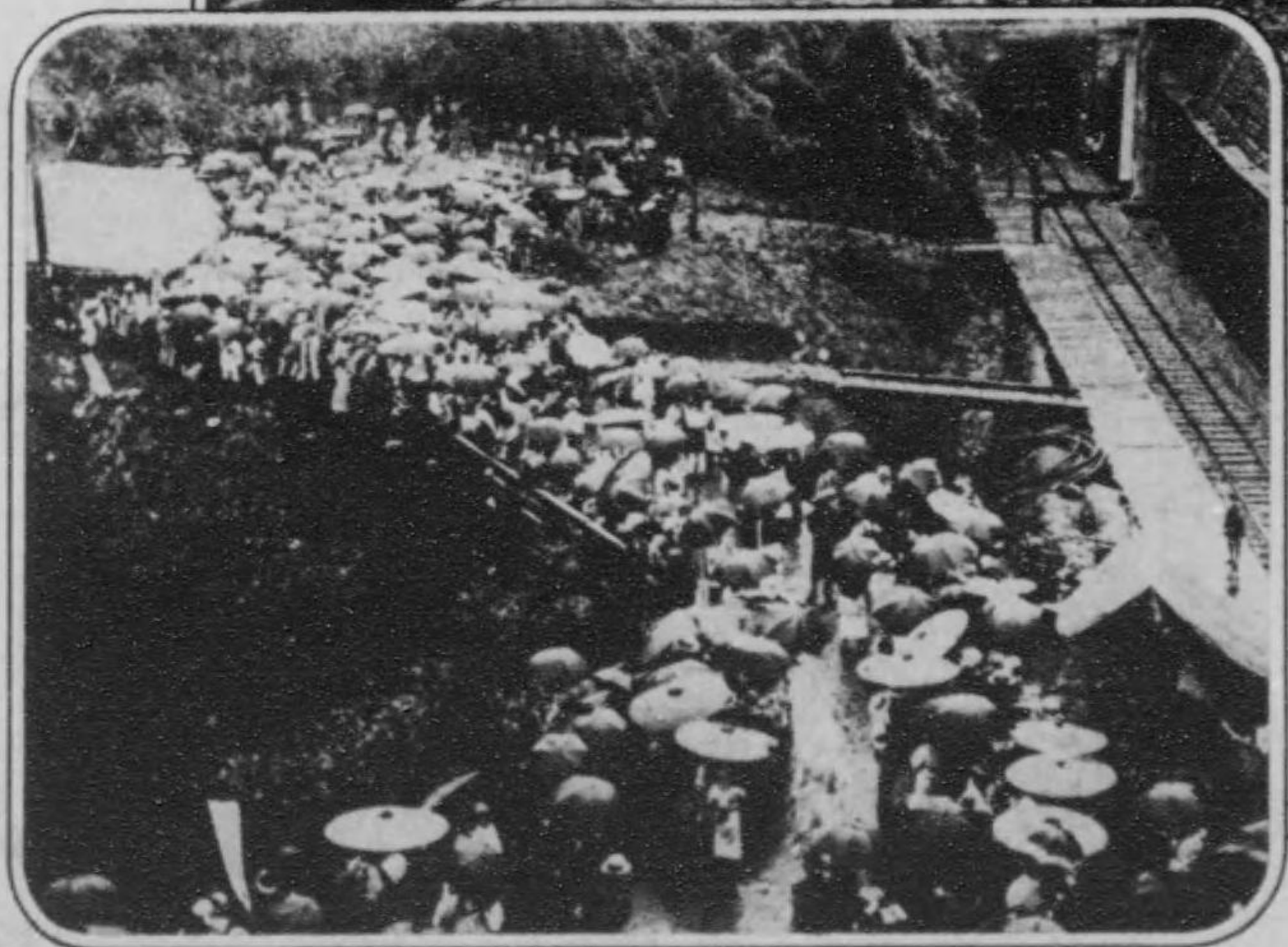
新吉原地震 出火之圖



箱根越へに罹災者救
興の糧米運搬
陸軍第二師団



砲兵の避難者運び
糧米運搬の陣には山嵐から三馬へ
婦人の子供に預つて重荷の担車車で運ぶ



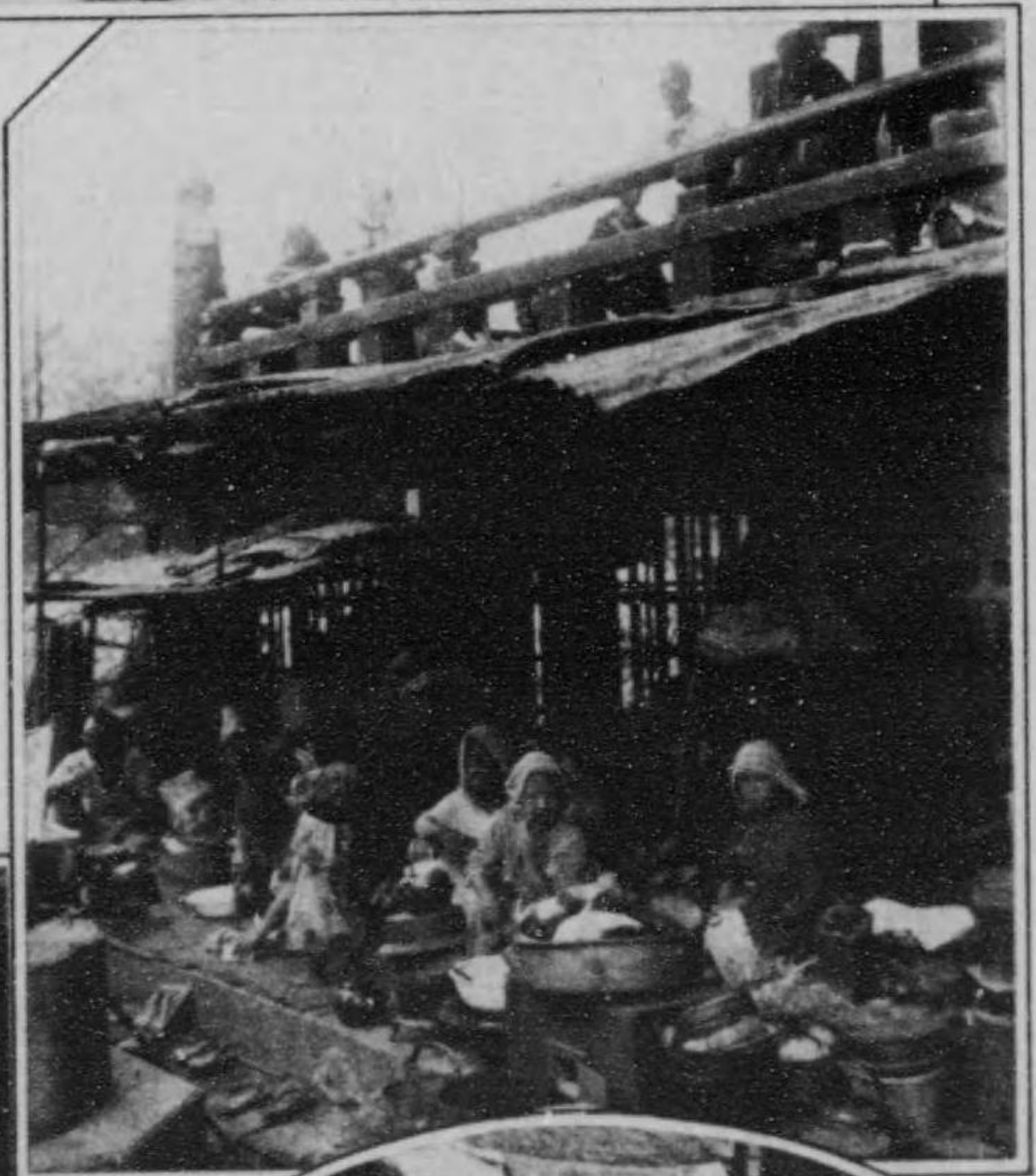
雨を冒して山越への避難
不通となつた中津線沿線の山越



蜂蟻状の避難小屋
宮城野原



様の下に假りの宿
四面火の海の噂中に在つて災を
受れた復興軍營

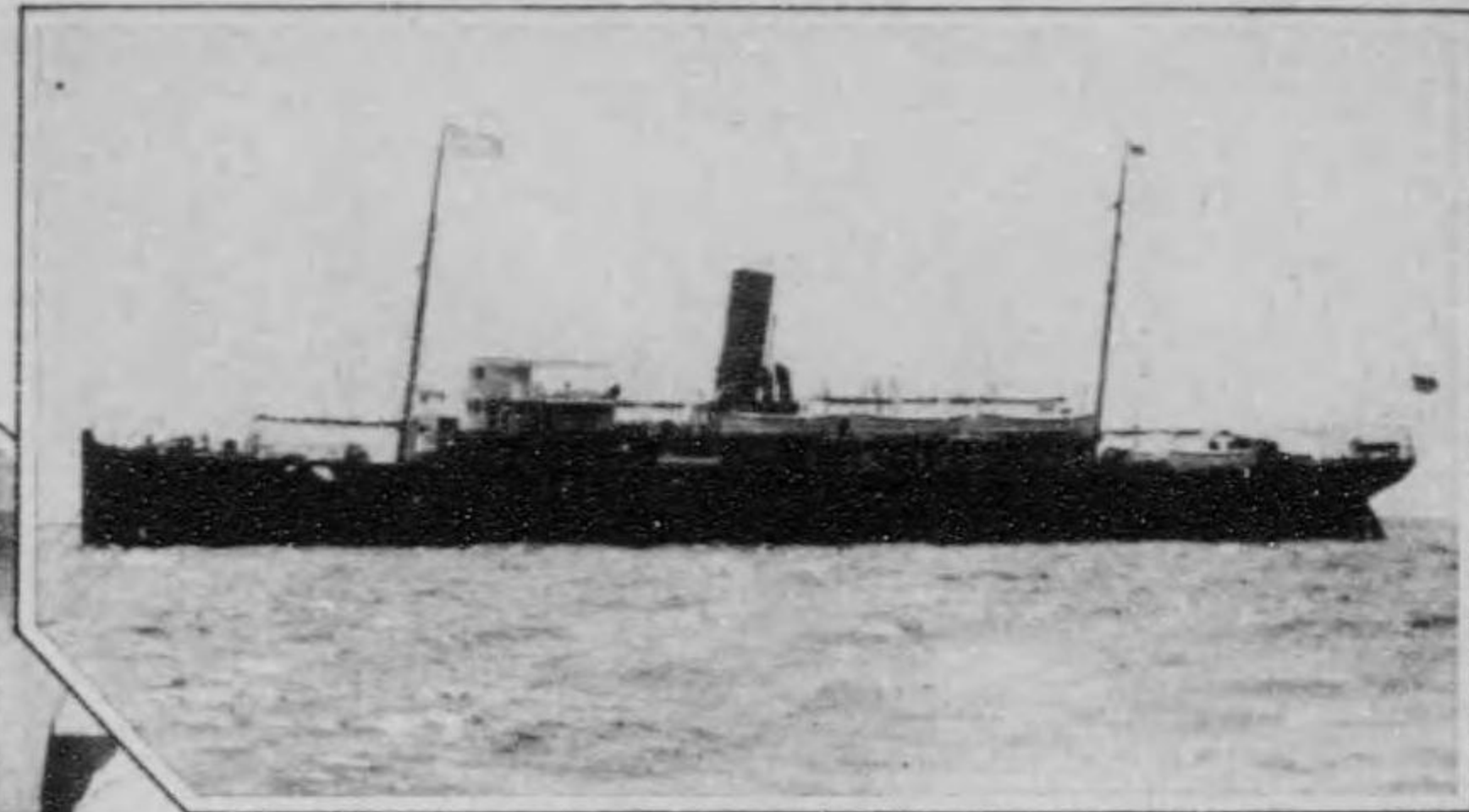


ね返るね母方の児童を原野橋
(京東)女た



運搬の上車

援救一第のりよ那支
(以平號誌新若戸神日二十)行一派代皇派國民



派急の船護救者病傷災罹



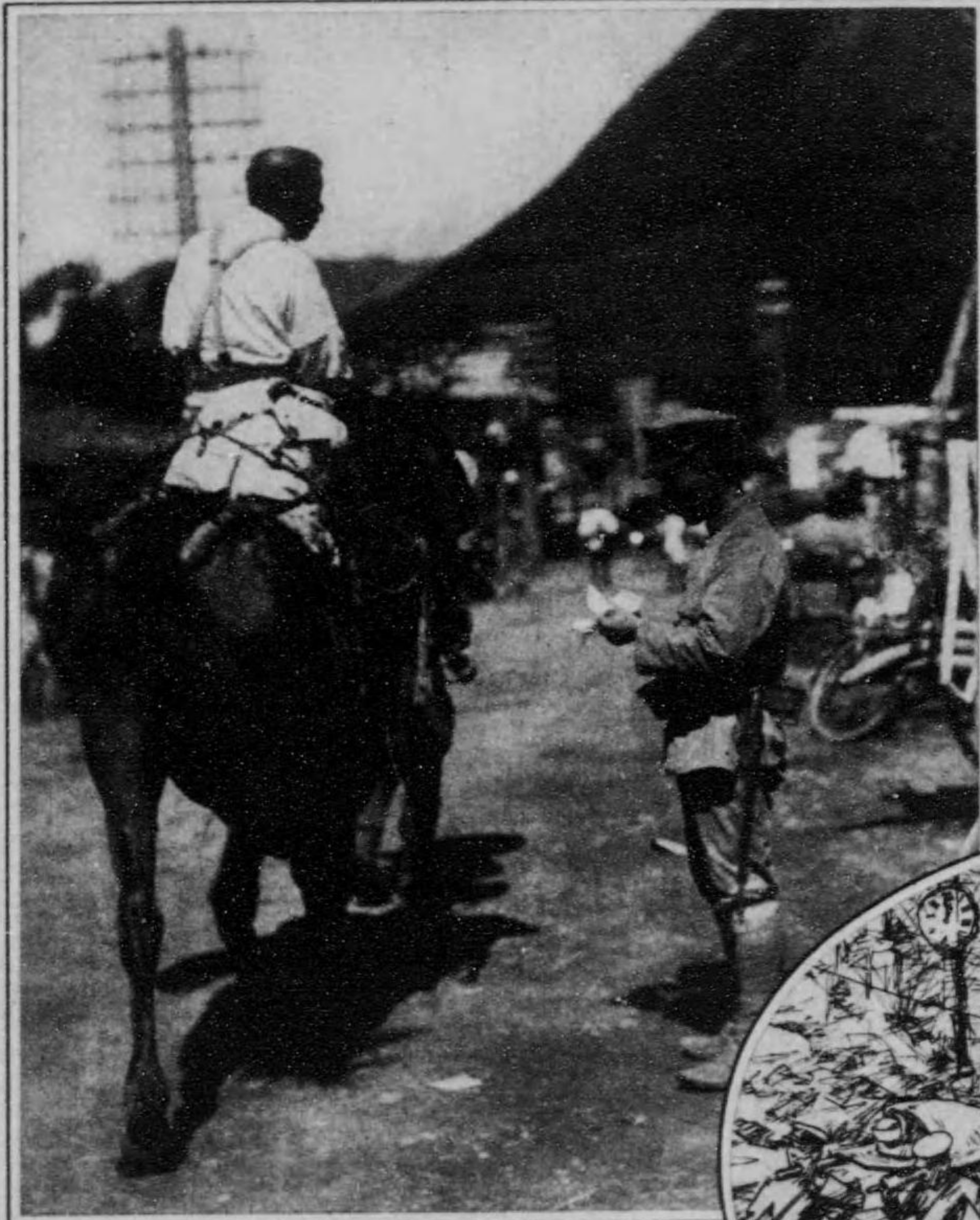
抱介の母病て上踏
向回縁無

二十) 事災皇) 千七萬四傷負一人一六千二萬七者死魂の皇
最で中そのるてし期に葬火宛人百五千三日一で (一) 國のてま日
新造の神道で編廣審判所本たし出を著死のく多

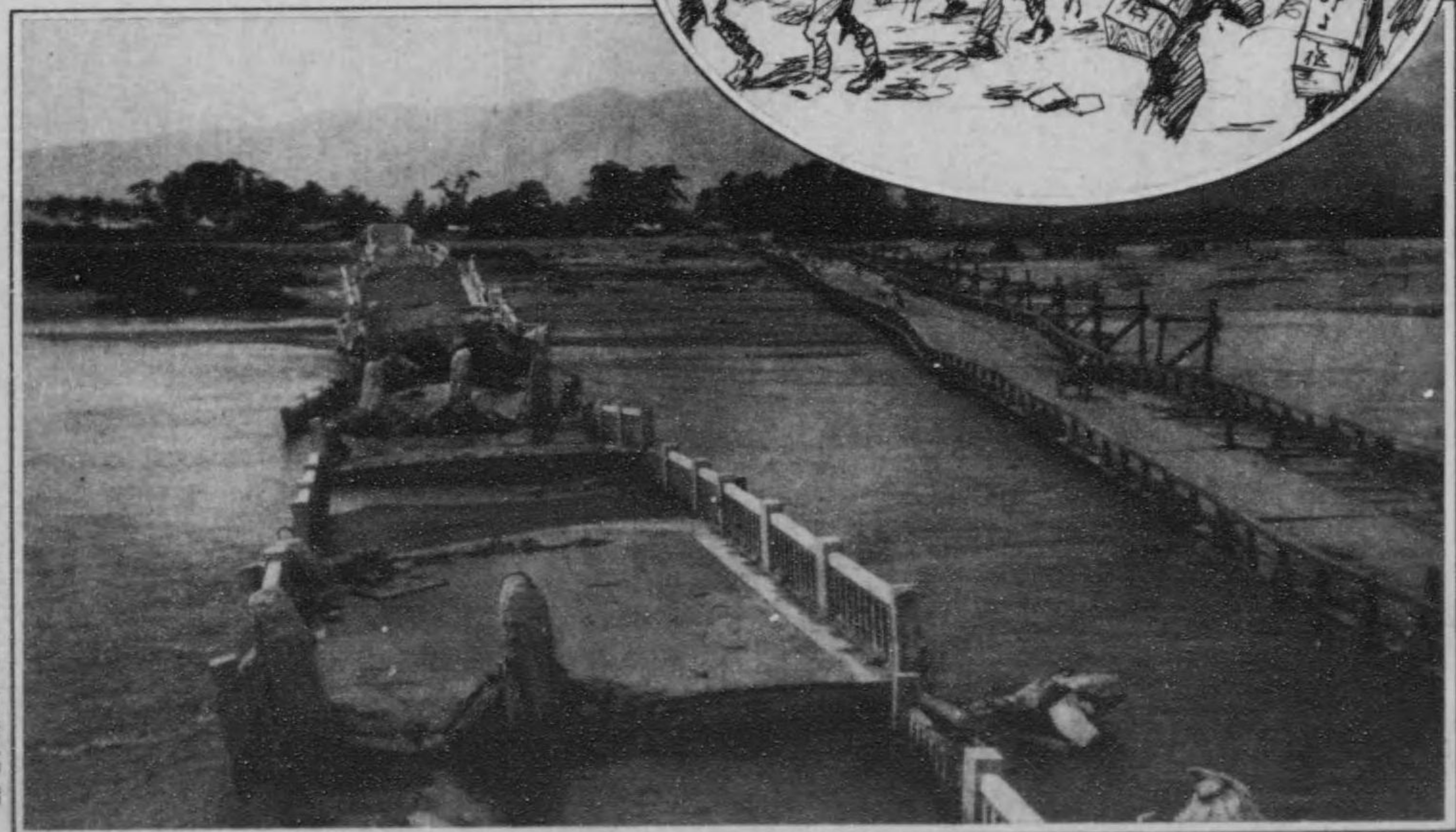


(當手急應の隊軍)て中管維
理工女たれ脱くふ危に墮倒の船士富河山小一

災後各地に入る者の身許監視を厳格にする
箱根の新聞



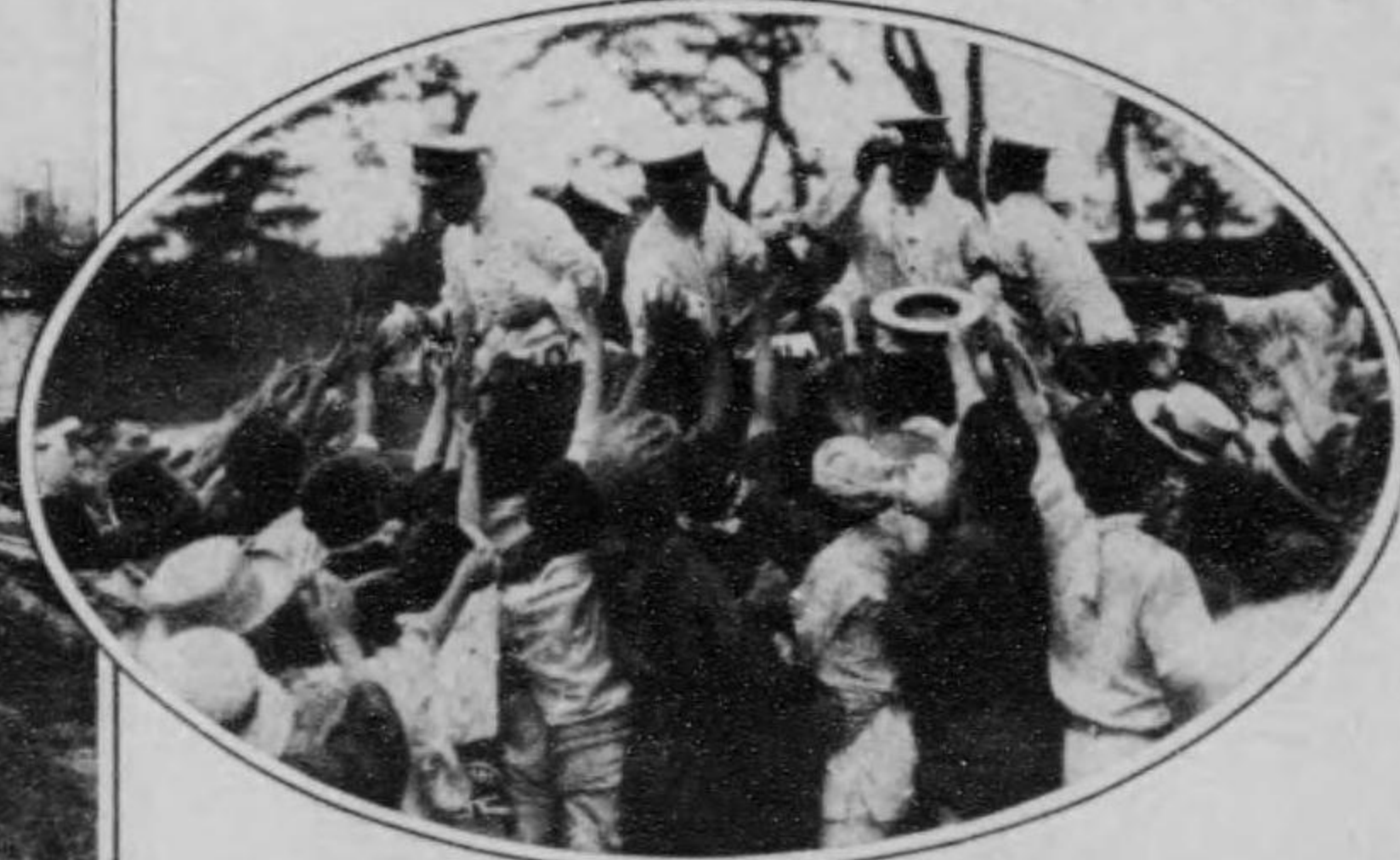
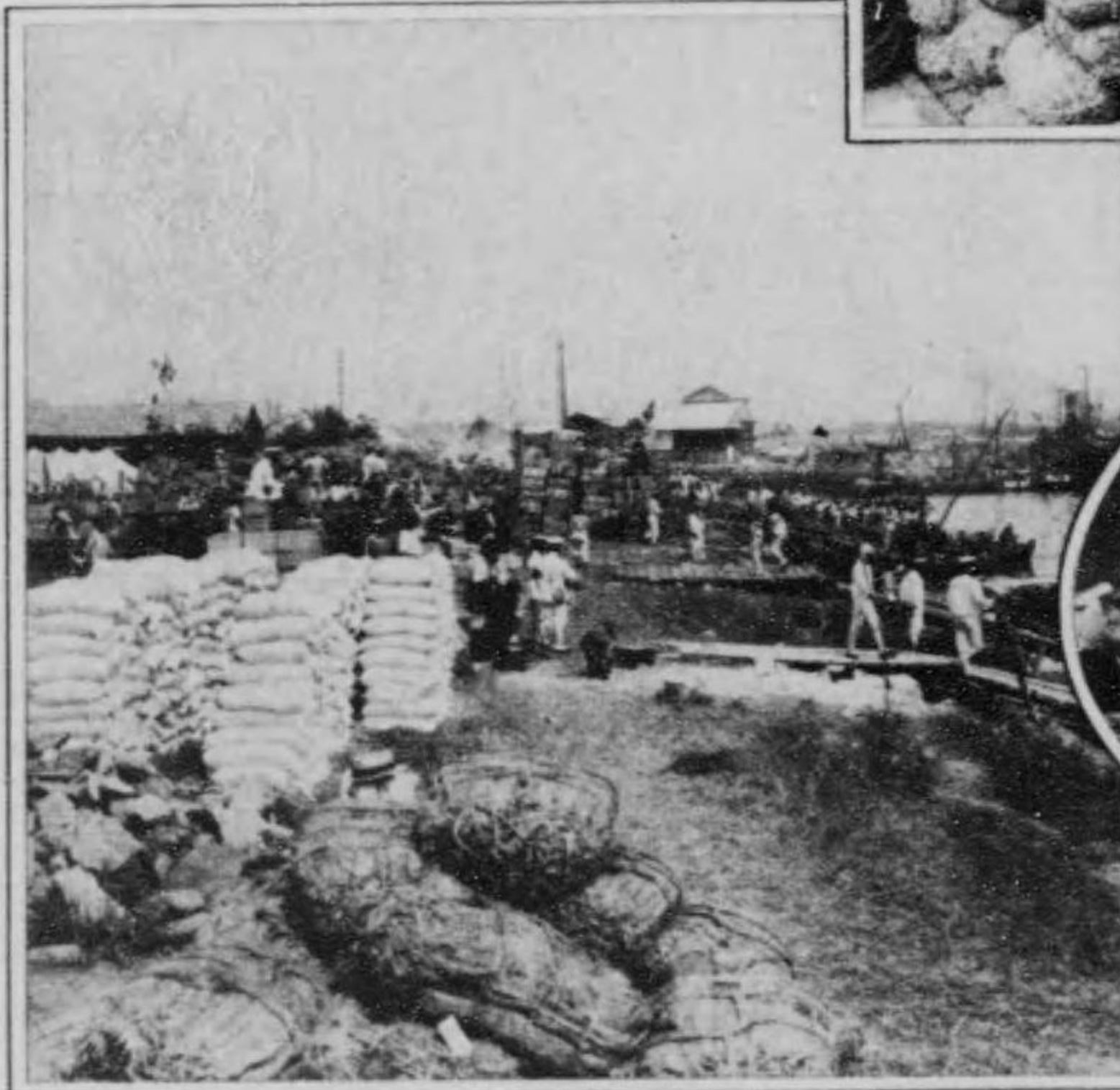
(チツクス上途の京東土集) 朝の日三月九
れ運一隊隊や校學警軍) てせ乗二車踏を者傷負物出運師一第署近
き辺の船夫てつ負付つ一を船のつ二の供子の人二だん死く行て
くてし増に々別が隊の入る運いて立を旗の人ね尋るくてれ逃らかな
ぬきでは眼正もてさる



落ちた酒匂川の新橋補橋

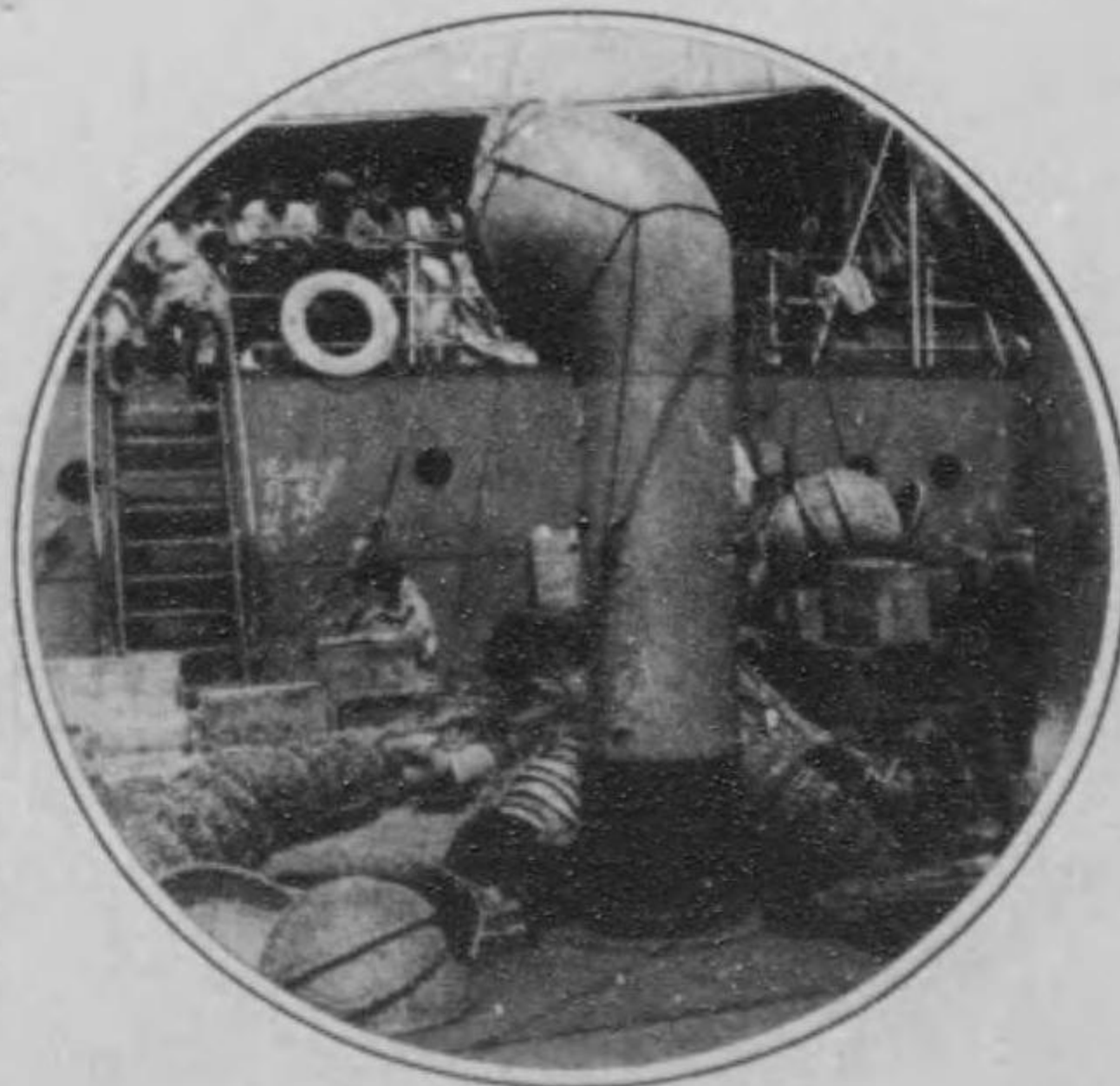
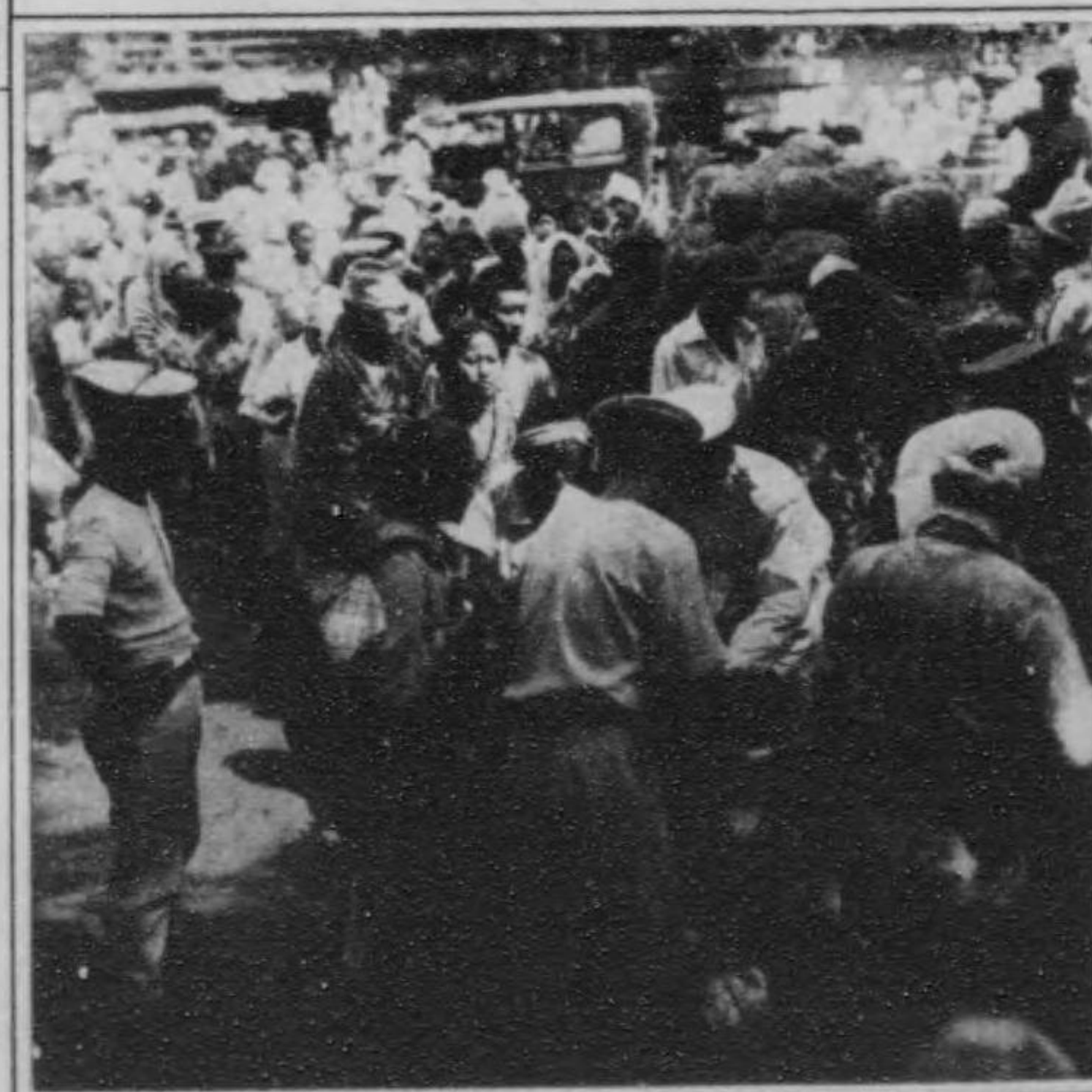


救恤品の荷揚げ (東京) (救恤品の荷揚げ)

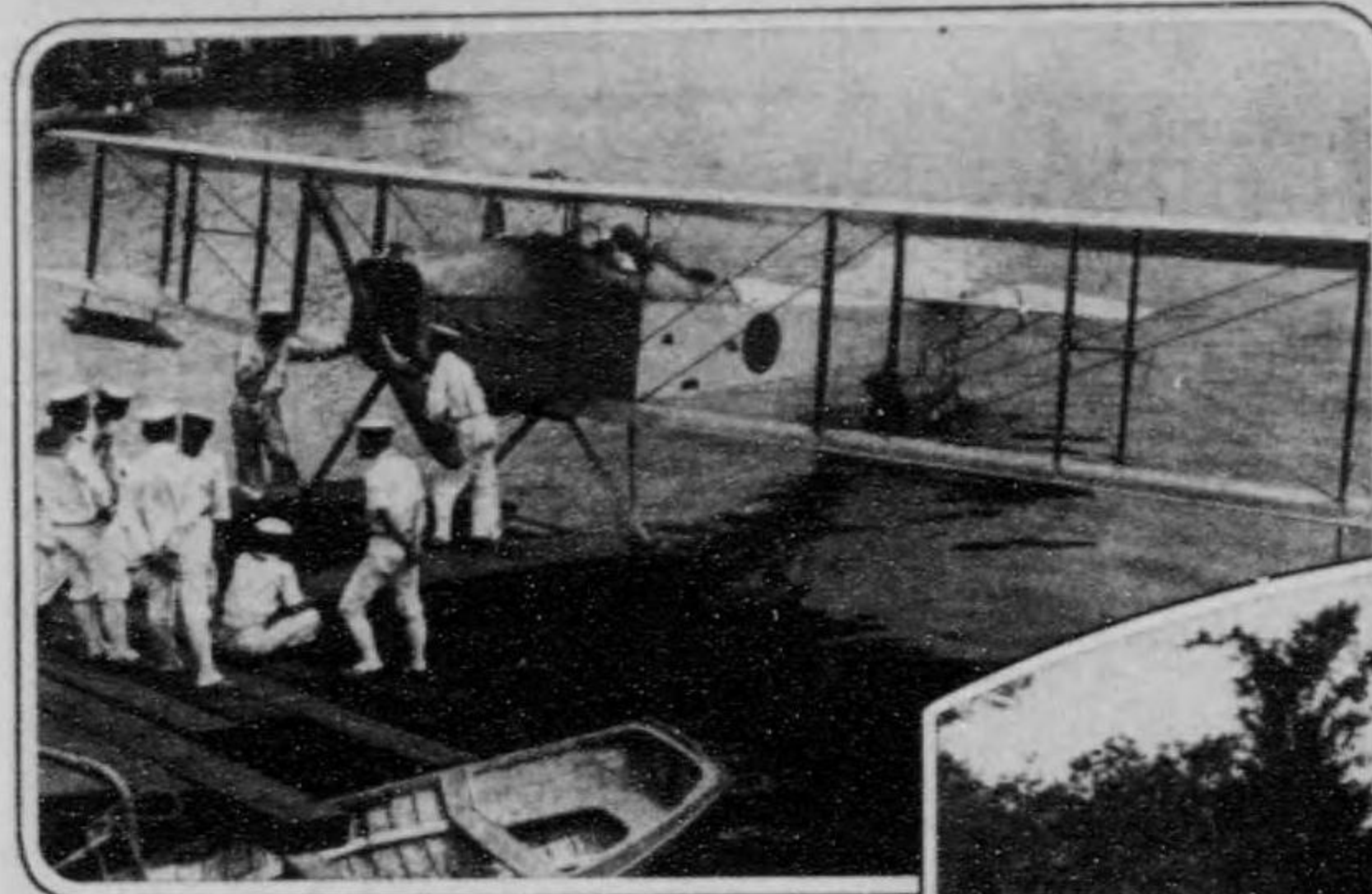


大阪築港から米種の出積 大阪府十五万石を災地を以て 大阪府臨時米穀配給所にて一日二十万石を配給す

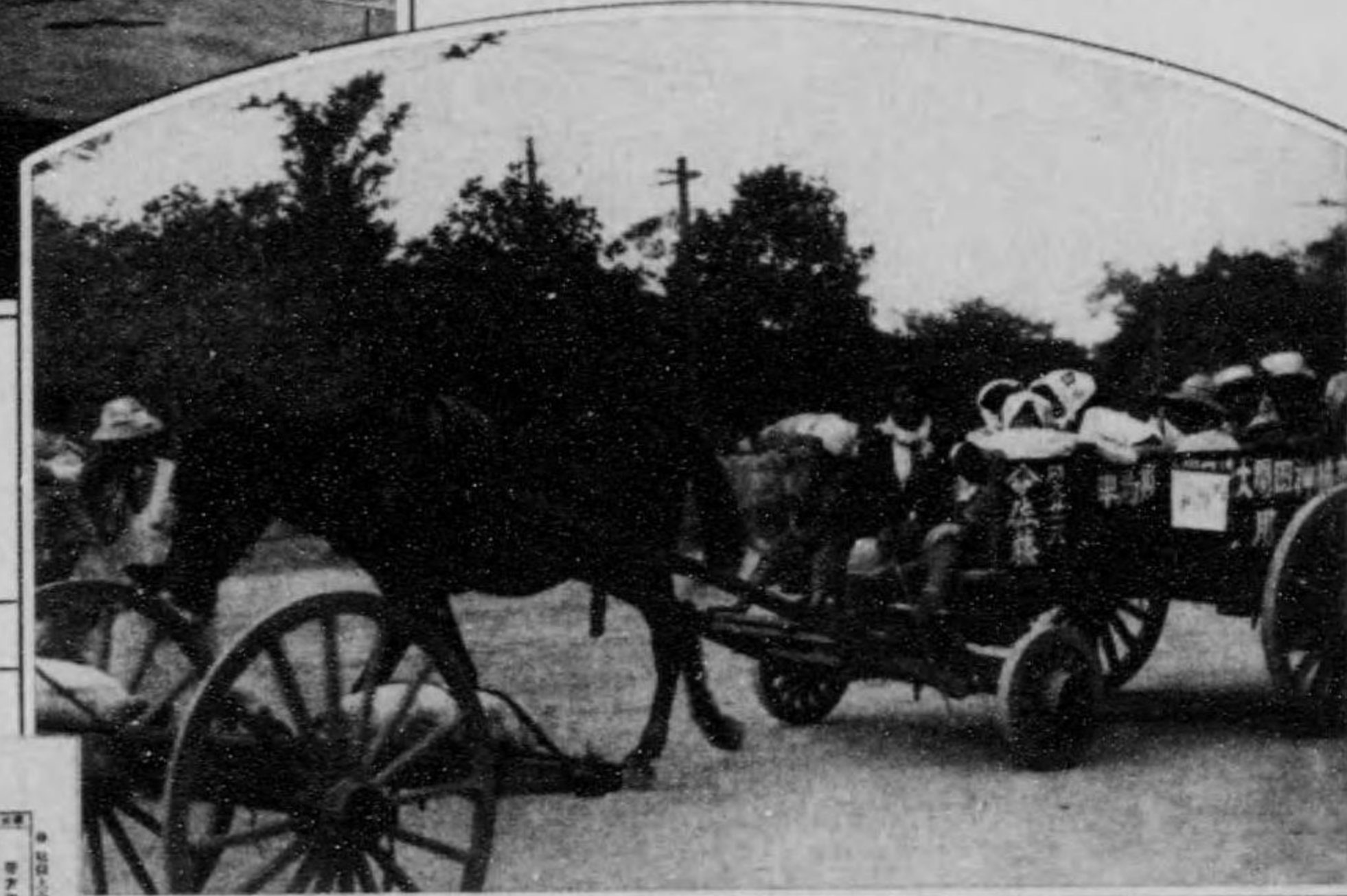
食糧品の給與 (東京)



お勝手用具を積み込む (大阪築港から東京)



乗合馬車 (被災都市の交通) 人を乗せ馬を以て



芝浦の連絡通信飛行



電報報信紙

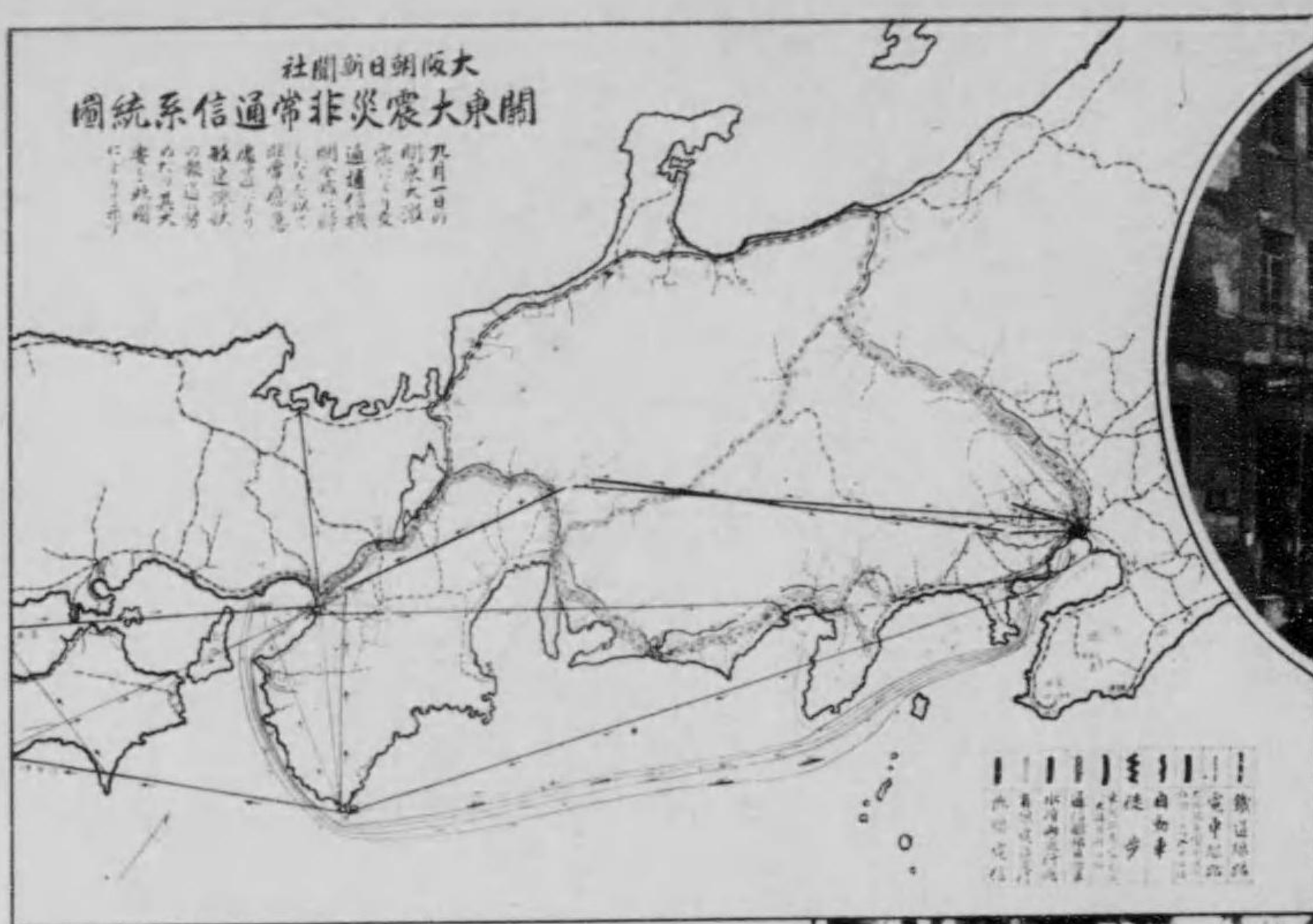
東京	...
芝浦	...
...	...

東京からの通信報信紙に書きたま
まの電報

東京中央郵便局の籠ポスト



東京の電車 電車電報機一車電失の京東 上は千三萬加客の電車電報機一車電失の京東 上は千三萬加客の電車電報機一車電失の京東



社聞新日朝京東 たふ道に危の火災



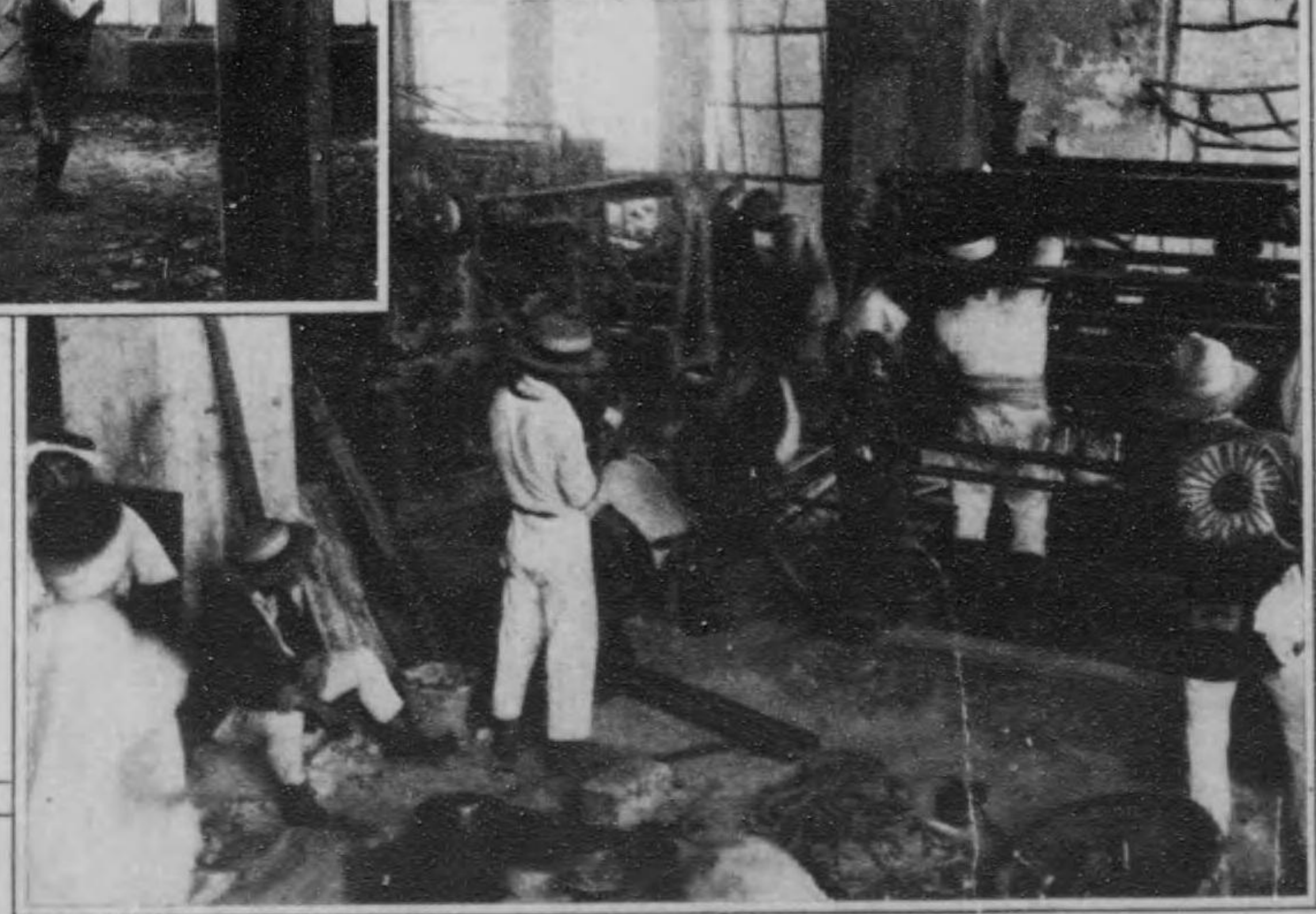
を在機して新聞を地各の報日らか京東
軍廣立動活開新日朝京東にムルキフ



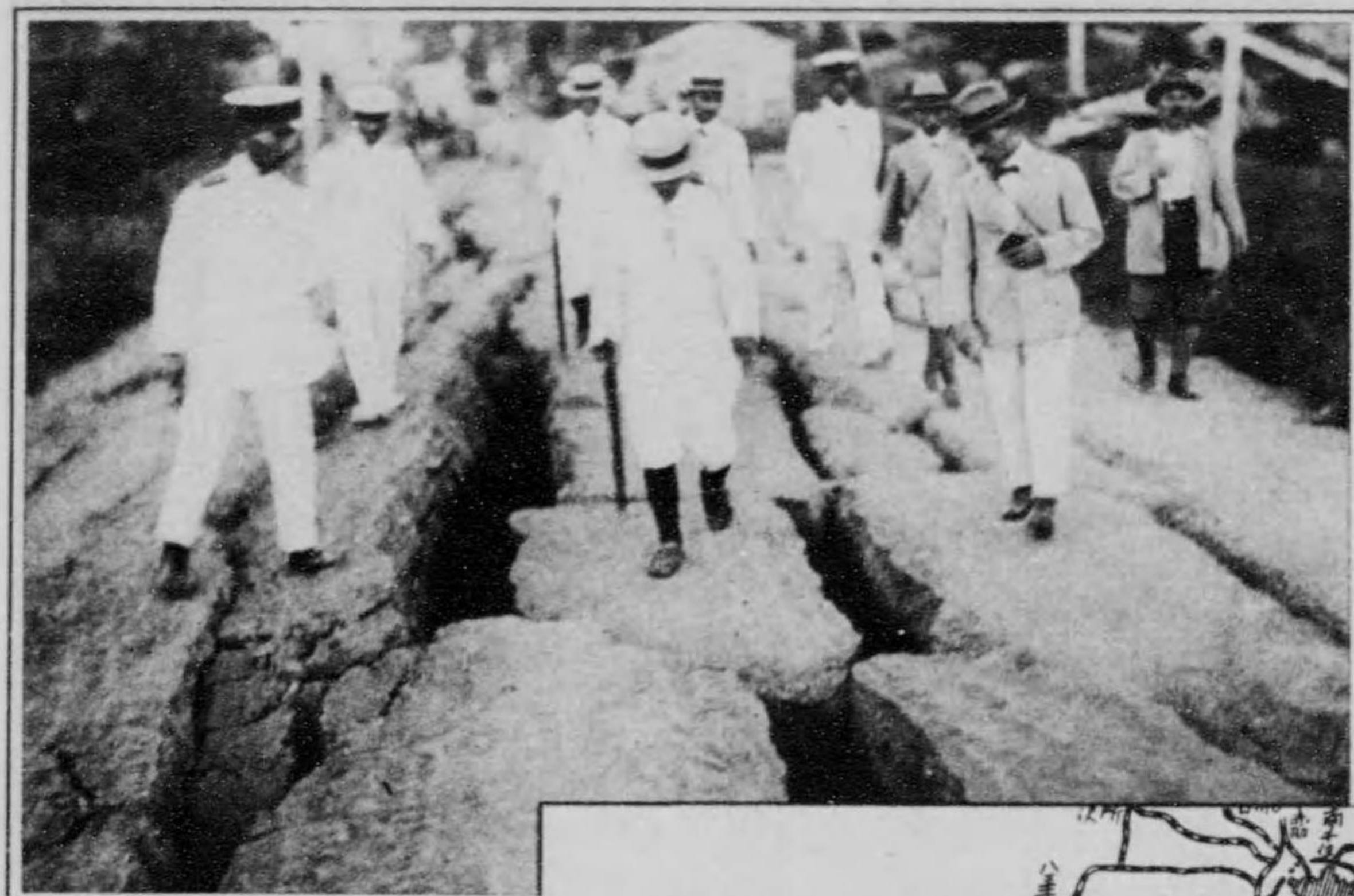
理整の跡機社朝東

統一第

十二頁の半欄内には上野廣小館十六頁マ
スタをかけて書きの奔走は海軍士士の闘り



東側は良は家族の安否も知る定今この聯合新聞社の重大なる使命に能す。共に奮闘し無力
窮め士日災後第一の東京朝日新聞を發行するに際つた「輪轉日報機」の働き上げ



館山の龜裂
編纂部で震害調査に赴いた中村博士の一行



中央氣象臺の中村博士 は震源地大島の貫嶺
觀察を始めて調査したところによつて同島の地質
尖は相模灣で南海の東方約三十キロ(七哩半)伊豆の大島と初
島との中間(東經一三九度〇分北緯三四度五分)の間に
にて餘震の数は實に五千九百餘は所談地質をいふこと
ある

(濱美領政東伊豆伊)とあの噴海



てけあ聖大らたいひが水の海
示揚のいし認め1の士博野佐



怨みはながし
 焦土の上に
 家は焼け夫は亡し
 佇みて又涙しぬ
 さびしきも淋し
 絶望の淵に
 日はくれはて
 星なく月なし
 仰ぎ見れば
 亡き夫のめぐみ
 大黒様のお顔
 こぼれ落ちぬ幼児の上に



八千代生命保険株式會社

假營業所 大阪市南區赤吉橋通三丁目
 振替口座 大阪 四九八〇番

終